

# 刊行にあたって

2009年7月に第1回会合を行ったマレーシア映画文化研究会は、5年間の活動を経て、2014年9月に混成アジア映画研究会として新しい段階を迎えました。混成アジア映画研究会の最初の研究報告となる本書の刊行にあたり、マレーシア映画文化研究会の活動を振り返り、混成アジア映画研究会が目指す方向と活動内容を紹介します。

マレーシア映画文化研究会は、マレーシアの歴史・文化・社会を専門とする研究者グループが、ヤスミン・アフマド作品をはじめとするマレーシア映画に魅了されたことに始まります。マレーシアは、マレー人、華人、インド人、そしてさらに多くのさまざまな文化背景を持った人々から成る混成社会です。そんなマレーシアを舞台にした映画を十二分に愉しむには、中華世界、インド世界、イスラム世界、そしてマレー・インドネシア世界の言語・文化や社会への理解を持ち寄った方がよいに違いない、社会が混成的ならば受け手も混成的になった方がずっと愉しめるはずだという思いから、マレーシアや関連する地域の事情に通じて映画にも関心がある地域研究者が集まりました。その後、研究会のメンバーで愉しむだけでなく他の方々とも共有したいと思い、公開セミナー、ブックレット刊行、字幕製作・監修と研究会字幕による上映会、国際映画祭と連携した公開シンポジウムの開催などの活動を行ってきました。

その過程でわかってきたことは、マレーシア社会が混成的であるだけでなく、マレーシア以外の国も含めて映画製作の現場も混成的になってきているということでした。複数の国・地域のスタッフやキャストによる合作も増えていきますし、映画の特徴を国別に捉えるのが難しい場面も多くなっています。マレーシア映画を理解し愉しむにはマレーシア以外の国・地域の映画も知る必要があるということがわかってきました。

このような考えから、『地域研究』の第13巻第2号(2013年3月発行)では、この研究会が中心となって「混成アジア映画の海——時代と世界を映す鏡」という総特集を組みました。「混成アジア映画」をテーマに、日本を含むアジア31か国・地域を対象に、地域研究者による映画の紹介と映画を通じた地域の紹介を行いました。この企画を通じて、研究会が扱う対象がマレーシア映画から他の国・地域の映画へと広がり、フィリピンやインドネシアの災害対応と映像を結びつけたシネアドボ・ワークショップの開催などにも展開していきました。

個々の作品にはそれぞれのテーマがありますが、現地社会にとって日常や常識に属することがらは意識して作品の主題に取り上げられないことも多いため、個別の作品を見ているだけではそのような潜在的なテーマに気づかないこともあります。地域や分野が

異なる複数の作品を見ることで、個々の作品を見ているだけでは気づかなかったテーマが浮かび上がってくることもあります。

映像を通じて現地社会のことを知る手法として、劇映画のようなフィクションではなくドキュメンタリーもあります。ドキュメンタリーは、映像の編集が行われているとはいえ、製作者が意図的に作り出された映像ではないという意味で劇映画に比べて客観性が高く、しかもテーマやメッセージが明快なので、教育研究の素材として扱いやすいという特徴があります。それに対して、劇映画は製作者が意図的に作り出したフィクションなので、そのままでは教育研究の素材として扱いにくいと言われてきました。ただし、前項で書いたように、意図して作品のテーマに取り上げられていない日常や常識が作品の中に入り込んでいるため、その部分をうまく掬い上げることができれば、劇映画も地域性や時代性を読み解く素材として十分に役立つはずです。しかも、現地社会の事情に通じた外部者の目を通すことで、作り手や観客が意識していなかったテーマが浮かび上がり、「再発見」あるいは「逆輸入」が起こる可能性もあるかもしれません。

このような考えのもと、マレーシア映画文化研究会を発展的に継承する形で、対象を東南アジア(ASEAN諸国)に広げた混成アジア映画研究会を組織しました。混成アジア映画研究会では、マレーシア映画文化研究会で取り組んできた公開セミナーやシンポジウムの開催などに加えて、混成アジア映画の「読み解き文法」とも言えるような、アジア映画に見られる文化コードの抽出と収集にも取り組んでいます。表面上の意味で理解しても作品の内容は十分に理解できるけれど、地域的な事情を理解するとその作品に込められた別のメッセージ(あるいは無意識に込められていたメッセージ)も読み解くことができるようなアイテムのことです。

その一例に凧揚げがあります。中国で先祖の墓参りをする清明節に凧揚げをする習慣に由来して、マレーシア、シンガポール、インドネシアの主に華人が関係する映画に登場する凧揚げの場面には、死別した人との通信・連絡の意味があります。たとえば『Raindogs』(ホー・ユーハン監督、マレーシア、2006年)や『ムクシン』(ヤスミン・アフマド監督、マレーシア、2007年)に凧揚げの場面があります。これを見たままに凧を揚げている場面と見ても話は十分に通じますが、死別した人との通信・連絡の意味が込められていると知って見ると、その場面に隠された物語を読み解くこともできます。このような文化コードの情報を積み重ねていくことで、アジア映画の「読み解き文法」の地図が描けるのではないかと考えています。

このようなアジア映画の「読み解き文法」は、映画を読み解いて愉しさを増すだけでなく、現実のアジア社会を理解して付き合っていく上での助けにもなるはずです。人と出会ったときに日本人はお辞儀するけれどマレーシア人は握手するという外面的な文化

コードは観光ガイドにも載っていますが、そこからさらに一步踏み込んだ付き合いに見られるさまざまな「文化のかたち」を引き出して、それを映画を通じて表現できないかと考えています。たとえば、車に乗せてもらったときに助手席ではなく後部座席に座ることや、食事しているときに相手におかずを取ってあげることや、気になる相手に水をかけることは、どのような心理的な距離感を相手に伝えることになるのか。混成アジア映画研究会は、アジア映画、そしてアジア社会についてのもう一步先の読み解きと付き合いを深める助けになることを願って、アジア映画の楽しみ方の1つを提案し、共有したいと考えて活動しています。

本書は混成アジア映画研究会の2015年度の研究内容をまとめたものです。第1部は研究会メンバーによる混成アジア映画に関する論考で、第2部に関連させた「たたかうヒロイン」というテーマに緩やかに関わり、素材やアプローチを多様にするような論考を集めています。各論考の内容とともに素材やアプローチの多様性も味わっていただければと思います。

第2部は、研究会が行った公開イベントのうち2015年9月20日に行ったワークショップ「変身するインドネシア——力と技と夢の女戦士たち」の記録です。インドネシア映画『黄金杖秘聞』を題材としたワークショップで、パネリストの特別寄稿2編および当日配布した作品情報を採録しています。

第3部の「混成アジア映画の現在」では、地域事情の専門家が国・地域別あるいはテーマ別に映画を紹介しています。『地域研究』の「混成アジア映画の海」特集号の第Ⅲ部のアップデート版としてご覧いただければと思います。

なお、混成アジア映画研究会は、京都大学地域研究統合情報センターの公募共同研究「危機からの社会再生における情報源としての映像作品——東南アジアを事例として」(2015年4月～2016年3月、代表：篠崎香織)との共催により実施し、研究会の開催にあたっては国際交流基金アジアセンター、公開ワークショップの開催にあたっては大阪アジア映画祭、アジアフォーカス・福岡国際映画祭、東京国際映画祭のご支援を賜っています。研究会の活動にご理解とご協力を下さっている機関や方々に感謝申し上げます。

京都大学地域研究統合情報センター

山本 博之